

にわにはにわ の

明日からやること
を今日やってみる

kei M

とふよりTelありき
彼方に映りし娘は笑みを満面にたたえたり
父母談笑 子には宝となりけるか
これは日記じゃないんだってば。

※※※※※※※※※※※※

草高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。

源氏物語 桐壺

三が日明け早々に実家に戻った。白杖の父と歩くのに一苦労な母が暮らす実家。年末母が体調を崩し、庭が大変なことになっていた。

草ぼうぼう、雑草の天下。

枇杷が伸びる家には病人が出る、と庭木としては嫌がる人がいるというが、この庭では枇杷がなくとも病人が出るだろう。いや、枇杷は万葉の葉になるので病人が集まるともいう。鶏が先か卵が先か。この一面の枯れ葉畑は、何の煎じ薬になるのだろうか。考えながらも手は枯れたススキを引っっこ抜く。後に残った茶色い葉を五cmほどの高さに刈りそろえる。異国で緑の雑草を高さをそろえて刈りあげると遠目には芝に見えるという。時々小さな花も咲いて、それはそれで風情がるのだろう。しかし目前に広がる茶色い五cmは目もあてられないほど哀れで、容赦なく鋤(クワ)でひっくり返したくなる。この家に住んでいた頃はここに小さな畑があり、鋤(スキ)や鋤(クワ)も家庭菜園なりに揃っていた。今もどこかにあるのだろうか。

しかし今は悠長に探すほど気持ちに余裕が持てない。昨年までキュウリやトマトを植えていたというプランタンやボックスを端から庭にぶちまける。ネギらしき箱も容赦しない。病床から病院に移った母は、もう何にも植えていないと言っていた。

ふと玄関先で父の呼ぶ声がした。

「アマリリスが白い箱に植えてあるんだが」
今頃言われても。すべては長い小山の中に。

それでも自然とは強いもので、緑の細長い葉からはヒヤシンスを思わせるあざやかな青紫のムスカリが、ネギより太い葉からは黄金色したクロッカスが、菊に見えた葉からはケシ色のナガミヒナゲシが花を咲かせた。ガレージ上に野ざらしになっていた草ぼうぼうの鉢から、紫蘭が開いたのには驚いた。温室が必要な種だと思っていたのに。

「シンビジウムは四月の中旬に鉢分けだ」

シンビジウムって何かと聞くと、父は応接間の前のバルコニーに並べてある鉢だという。ご免。それもほぼ茶色だったし、鉢から根がはみ出していたのでいっぺんに庭にひっくり返してしまいました。

母、危篤状態から脱出して4月。やっと救急病院から一般病院に転院した。今や多種多様な緑葉が庭を覆っている。

何か花は咲くのだろうか。

退院した時の、雑草を前に悲鳴を上げる母の姿が見えるようだ。

早く帰ってきてほしいが、花にも早く咲いてほしい。

思う端からアマリリスがつぼみを伸ばす。

草は、強いとつくづく思う。

母も元気で戻ってきてほしい。